八尾歴史物語

四五巻

続・河内名所図会を訪ねて⑦～観光地になった高安千塚（せんづか）・前編～

江戸時代のベストセラーで、現代の観光ガイドブックの始まりともいわれる『河内名所図会』に、高安山麓（さんろく）に広がる近畿地方有数の群集墳である高安千塚古墳群（以下「高安千塚」）を紹介した2枚の挿絵があります。それが高安千塚の中心支群である服部川支群を描いた「郡川のほとり」と、郡川北支群を描いた「法蔵寺（ほうぞうじ）の境内」です。

高安千塚は、この『河内名所図会』によって河内国の有名な観光名所になりました。多くの古墳を簡単に目にすることができる服部川支群や、参拝した際にも見学しやすいその南側に位置する法蔵寺境内の古墳は、各地から多くの人が訪れたことでしょう。

「郡川のほとり」を描いた右の絵は、横穴式石室とおぼしき場所で7人の人物が、古墳の副葬品（勾玉（まがたま）や土器）などを掘り出したところを描いています。江戸時代から古墳の乱掘が盛んに行われていたことがわかる唯一の絵画資料です。当時の人々が副葬品に強い関心を示していたことがわかります。しかしながら、現代の観光地でもしばしば問題になるように、観光客の増加から、さらに乱掘が深刻な問題となっていきました。いにしえの時代に興味をかきたてられた人々が、石室内に出入りして、古墳の副葬品を持ちだしてしまい、多くの古墳が荒らされてしまったのです。

高安千塚古墳群の挿絵

現代では高安千塚が、横穴式石室に人々が葬られた古墳時代後期の古墳（墓）であることが知られていますが、当時の人々は古墳とは思わずに観光していたのです。【続く】

☆問合せ　文化財課
TEL 924・8555
FAX 924・3995